

ウチナーンチュ・スピリットのゆくえ

——エスニシティで繋がる世界——

白水 繁彦

0. 問題の所在

1972 年春、筆者は敬愛する文化人類学者の故野口武徳に導かれ、初めて沖縄を訪れた。「本土復帰」直前の沖縄は筆者に強烈な印象をあたえた。その衣食住は、どこか中国風であり、日本風でもある。そして、なんとなく東南アジア風でもある。それまで日本国内のさまざまな地域を旅してきた筆者が初めて体験した「異文化」、それが沖縄文化であった。

その後、1978 年春に初めて行ったハワイで、偶然にも沖縄系の二世の S 夫妻と懇意になる。沖縄との深い縁を感じざるを得ない。かれらをとおしてハワイの沖縄系社会（現地の表現では「オキナワン・コミュニティ」または「ウチナーンチュ・コミュニティ」）にも入り込んでいくことになった（その過程での仕事のひとつが、〔田村・白水 1986〕である）。オキナワン・コミュニティとの長くて深い付き合いのなかで、ハワイのウチナーンチュにとっては沖縄が特別の存在であるということがわかってきた。すなわち、かれらは沖縄との直接的、間接的交流のなかで独自の沖縄イメージを紡ぎ、織り成していったのである。そのイメージは多分に理想化され、称揚されることも少なくない（白水 2004: 304-327; Hui O Lauima 2000: 3-4）。筆者が観察を続けているハワイのオキナワン・コミュニティのリーダーたちはウチナーンチュ・ムーブメントを怒濤の勢いで推し進め、80 年代から 90 年代にかけてコミュニティの多くのひとたちに「ウチナーンチュ・スピリット」（新垣 1998: 30-36）を植えつけることに成功した（白水 1998: 89-110）。

そうしたハワイをはじめとする「海外ウチナーンチュ」の自信に満ちた行動は、かれらと交流をもつ沖縄のメディアや知識人にも影響を与えずにはおかなかった。それらは『琉球新報』『沖縄タイムス』『沖縄テレビ』による海外のウチナーンチュ取材記事・番組で長期間にわたり伝えられた。影響の送り手と受け手が交替する関係のなかで、沖縄県は世界中からウチナーンチュを招いて交歓する「世界のウチナーンチュ大会」を 5 年に一度催すことに決めた。

本稿は、沖縄においてハワイや世界のウチナーンチュとの交流にかかわってきた人びとに対して行ったインタビューのうち、華僑ならぬ「琉僑」を目指す世界ウチナーンチュ・ビジ

ネス・アソシエーション (WUB) の事例に絞り、沖縄系のエスニシティを基礎とする交流の経緯を明らかにしてみたい。なお、WUB の成立と不可分の関係にある「世界のウチナーンチュ大会」についても適宜言及する。

I. 沖縄系移民の世界的ネットワーク（「琉僑」）の現状について

Y.O.氏 インタビュー日時 2005年3月6日 於：那覇市

氏は地元紙『琉球新報』で長く記者生活を続け、特に現地取材に基づく海外ウチナーンチュのレポートで名高い。以下とくに断らない限り Y 氏の語りである。() の中は筆者による補足。次項以降のインタビューも同様。

1. WUB 発足の経緯

1990 年、第 1 回世界のウチナーンチュ大会が開催された。この時は、初めての県の主催というので世界中から 2000 名以上がやってきた。大いに盛り上がったし、海外から来たウチナーンチュは「母県に帰ってくることができた」「世界の仲間と会えた」というので大変感激していた（筆者もこの時会場にいた。筆者の印象では、宜野湾の巨大なコンベンションセンターが会場であったため、その規模や豪華さにも圧倒され、ウチナーンチュとしての誇りを新たにしたのではないかと筆者注）。ともあれ、初顔合わせ、なつかしいという感情のみで終了。最初だったのでそれでよかったのかもしれない。

1995 年、第 2 回の世界ウチナーンチュ大会を開催した。第 1 回と同様の規模だったが、内容を煮詰めるべきという意見がでる。要するに、費用を 3 億円もかけ、多数のウチナーンチュや芸能団が行ったり来たりだけではもったいない、というのである。実務的な、ビジネスの交流はできないか、なにか世界のウチナーンチュのビジネスの組織はできないものかという声が出てきた。そこでイメージされたのが発展する中国の牽引力のひとつ「華僑」のネットワークである。世界の琉球人のネットワークということで「琉僑」という言葉も飛び交った。

その第 2 回世界ウチナーンチュ大会の後、HUB (Hawaii Uchinanchu Business Association) が設立された。ボブ・ナカソネが主唱者である。ハワイの場合、それまでウチナーンチュを統合する組織としては県人会の HUOA (ハワイ・オキナワ連合会) が唯一だったが、こんどは HUB もある、という形になった。ボブらの懸命の働きかけもあって、世界各地に支部がつくられ、1997 年、WUB International の発足を見るまでになった。ただし、ハワイの場合、WUB の存在が大きくなり、県人会の存在がかすんでしまっているようにみえる。私 (Y 氏) のみるところ、WUB と県人会の関係はうまくいっていないのではないかと。役割分担や調整が難しいのかもしれない。なお、WUB はこれまで 8 回の世界大会を

行なっている。

2. WUB の現在の展開

現在 WUB は、全世界に 21 支部、全体の会員数は、450 名ほど。しかし、「琉僑」とはいっても、(華僑にくらべて) 実質が伴っていない。現在展開している事業のリストアップをして欲しいと思うが、作成されてはいないようだ。なお、移民の歴史や WUB の活動をまとめた本を出す動きは WUB 東京支部にみられる。

華僑の例でいえば、台北の客家の支部は、24 時間体制で、経済活動の情報が入ってくる。このような体制を WUB 本部でも敷くべきだと思う。

3. 世界のウチナンチュが集うことの意味

戦前に海外へ行った人々は、市町村のキャラクターを残している。いっぽう、沖縄県は、年々近代化しており、市町村のキャラクターが薄れつつある。そこで、海外のウチナンチュ意識を逆輸入しようというのが、世界ウチナンチュ大会の最初の目論見であった。

日本に復帰した後、沖縄県は本土の縦割りのシステムに組み込まれ、自信を喪失していた。地元紙が海外ウチナンチュの大活躍を連載し始めたり、地元テレビ局の前原氏が現場取材してきたビデオを放送(「世界のウチナンチュ紀行」)し始めたというのも、こういった背景があつてのこと。しかし、昨今は、世代を経て三世の時代になり、かつてのような大成功をおさめる人が少なくなってきたため、国や地域によっては題材に事欠くところも出てきたようだ。

II. WUB 沖縄支部の現状と将来の展望

WUB 沖縄支部幹部 M. T. 氏, K. Y. 氏, O. T. 氏, A. Y. 氏

インタビュー日時 2005 年 3 月 8 日 於: 那覇市

沖縄や海外の WUB を取材してきた Y. O. 氏の観察に続いて、当の沖縄支部の幹部たちにインタビューを試みた。幹部たちは WUB の現状をどう評価し、どのように将来を展望しているか。世界のウチナンチュが繋がるということをどう捉えているかをみてみたい。

1. 世界のウチナンチュが繋がるということ

中国の華僑が頭の中にある。ただし客家とはまた違う。移民した先において(ウチナンチュの場合) 沖縄の社会がちゃんと根付いている。精神面で沖縄の人が移住していった人々を助けているからだ。例えば、他県の移民の場合、負け犬が移民していったという見方をする人がいるなど悲壮感があるが、沖縄はまったく異なる。ちょっと稼いでくるといふ雰囲気

だ。他国に記念行事があれば応援に行くし、海外との交流が途絶えない。

WUB がこれまでの世界のウチナーンチュのネットワークと異なるのは、今までは、沖縄を中心としたハブ型であったのに対し、WUB は分散型のネットワークとなっている。つまり、沖縄を介さずに、ペルーとアルゼンチンが繋がったり、ハワイで世界ウチナーンチュ会議を開催したりするなどの活動が行なわれている。

海外の県人会は、一世、二世が三世、四世の国籍や教育問題を気にしている。したがって、一世、二世は文化に関心がある人々が多いのに対し、三世以降はビジネスなど実質面の志向が強い。だから、一世や二世が引退すると、WUB の会員が増えるだろうと見込んでいる。とはいえ、沖縄への想い（ウチナーンチュ・スピリットや沖縄文化に対する誇り、憧れ）は、海外のウチナーンチュのほうがはるかにつよい。いっぽう、今の沖縄の人の目は外（ビジネス）に向いている。WUB の会員のなかにも「ビジネスのために入ったのにみんな文化の話ばかりする」と憤慨するひともいる。

2. WUB の将来

かなり近い将来、このネットワークを有効に使うつもりである。例えば、EM 農業法や沖縄の民謡や空手を普及する手段に使える。文化はビジネスである。

私（空手家の O 氏）がそもそも WUB に入ったのは、空手の普及をしたらどうかという提案をするためである。空手人口は世界に 5000 万人いる。それにも関わらず、現在はエンドユーザー（現地の教室）だけが儲かっている仕組みとなっている。沖縄発祥の空手を使って沖縄の活性化につなげてゆきたい。

III. ハワイの沖縄系コミュニティとの関わり：民間交流の現場から

M. A. 氏 インタビュー日時 2005 年 5 月 10 日 於：那覇市

M 氏は元地元紙の記者。現在は引退して数々のボランティアな役を担っているが、そのなかに沖縄ハワイ協会長という職がある。同協会は私的な団体でいわば民間交流団体の代表格である。長年にわたって会長を務める氏の交流にける思いが今後のハワイと沖縄の民間交流に大きな影響を与えられる。

1. ハワイとのかかわり

私がハワイと初めてかかわりを持ったのは、1967 年の佐藤・ジョンソン会談の取材で特派された時である。当時、ハワイには、誰も知人がいなかったが、琉球政府の主席官房であった松岡方正氏の紹介で、（県人会の要人であった）仲嶺真助氏などと知り合うこととなる。ハワイでは、『ハワイタイムス』や『ハワイ報知』などの日系メディアを訪問したが、その

とき、口々に「沖縄の人々は何故復帰を熱望しているのか？」と質問された。そのインタビューに答えた私の談話が、新聞に掲載され、ホテルには電話が殺到することとなった。小笠原返還（1968）の取材にワシントンへ行った帰りにハワイへも立ち寄ったが、その時も同様の質問を日本語の新聞やラジオから受けた。というのも、当時のハワイの沖縄系の人々は、90%以上が日本への沖縄返還に反対で、沖縄はアメリカの準州になればよいと考えており、何故沖縄の人びとが日本復帰したいのか、実際沖縄の人びとはどのように考えているのか知りたがっていたのだ。

2. ハワイの沖縄系社会の今後

ハワイの沖縄系社会は、この5年から10年の間に変わってゆくだろう。今は、文化・芸能が物品や物産などより比重が大きい、今後は、逆に物品物産の比重が大きくなるだろう。そうなってゆくと、これ（文化・芸能）をやる意味は何なのかという声が必ず出てくるだろう。もちろん、文化がなくなるということはないだろう。文化というのは、ウチナーンチュ・アイデンティティや自意識の接着剤だからである。

ハワイでも、14、5年間、沖縄ブーム（ウチナーンチュの台頭が著しい、プレゼンスが大きい）である。それは、サキマ・アキラのような2世や3世がいるから。かれらが無私の精神で沖縄系社会をまとめあげ、プライドを持つようにリードしてきた。しかし、今後もブームが続くかどうかはわからない。

現在のハワイの沖縄系社会の特徴のひとつは、若い人にビジネスに関わる人が少なくなってきたことがあげられる（これまでは、ハワイにおける著名なビジネスマンにはウチナーンチュが多かった）。というのも、四世や五世はサラリーマン化してきているからだろう。もうひとつの特徴は異民族間結婚の増加による、沖縄をよりどころにしくなった人の増加だろう。ただし、米本土に住んでいるアメリカ人と比べれば、ハワイ（の沖縄系社会）は、現在のような濃厚な関係ではないにせよ、自らのルーツを遡る傾向は続くだろう。

3. 知己の関係と、文化・芸能が支えるハワイと沖縄のつながり

80歳代であるサキマ氏のような二世と自分は同世代である。ハワイと沖縄の関係というのは、実は、ハワイの〇〇さん（たとえば、サキマさん）との関係なのだ。個人的な知り合いの関係なのだ。では、〇〇さんがいなくなったら、どうなるのだろう。例えば、ハワイから普通の高校生が来たら、だれが空港へ迎えにいくのだろう。誰も迎えに行かないかもしれない。

（戦後）ハワイから豚を送ってもらったという思い出があるのは、65歳以上の人たち。沖縄戦で捕虜になり沖縄からハワイに送られた人（当時15歳から20歳、現在75歳から80歳位）がハワイに何千人がいる。かれらにとって、ハワイは天国のようだった。たいへんよく

してもらったからだ。こうした個人的な感情に基づく関係は重要である。ハワイから、サキマ・アキラが来た、といえば飛んで迎えに行く。知己であるからだ。戦場となり荒野と化した沖縄に、500頭以上の豚や700頭ものヤギを送るのに奔走してくれるなど、お世話になったという、人間本来の関係があるからだ。それに加えて、ウチナーンチュの「ちむぐくる」（まごころ、思いやりの心）の精神が働くので、ちょっと特別かもしれないが。

しかし、ハワイのエド・クバヤ、ジョン・タサト、ジュン・アラカワ、サキマ・アキラのような人々がいなくなってしまうと、ハワイと沖縄の関係は疎遠になってしまうだろう。

ただし、悲観する必要はない。世代が変わっても、ハワイとウチナーが繋がる接着剤はある。それは、文化伝統。何故、ハワイの中で沖縄が活発かというと、文化・芸能があるからだ。

沖縄とハワイをつなぐ接着剤としての文化・芸能とメディア

ハワイの日系社会のなかで、何故、沖縄（だけ）が母県とつながり、（県人会の）世代交代が上手くいっているのか、と問う人がある。私は、文化・芸能があるからだと答えている。沖縄では、なお新しい文化・芸能が作り続けられているし、移住地でも伝統文化が希求されている。つまり、沖縄とハワイは同じ文化を共有できるということだ。このときに、重要なのは、メディアの役割だったし、今後もそうだろう。特に、日本語放送局 KZOO のウラ・ケイコの役割は大きかった。オキナワン・フェスティバルはなくならないだろう。ウチナーンチュの団結の証であり、アイデンティティを獲得するキーポイントとなっている。

4. WUB の活動について

私はロバート・ナカソネと WUB を作り、WUB の副会長を3年間やっていた。

それぞれの国で、WUB の活動の仕方が違う。一番、WUB らしくない活動を行なっているのが沖縄支部。南米、本土（東京・関西）などでは、健康ブームに支えられ沖縄の物産を売ることができる。アルゼンチンでは、泡盛やオリオンビールを輸入すると売れる。ところが、沖縄は、他国から何を入れればいいのか？ という疑問がついてまわる。アルゼンチンからワインを輸入しているが、ワインは、どこからでも輸入でき、競争相手が多いので商売になりにくい。

沖縄支部のメンバーは G 氏が、自社の取引相手に声をかけて集まった人たちが中心である。会員は、100 名程度。会費は年に2万円。しかし、商売に繋がっていないというのが問題だろう。WUB 沖縄支部としても、何かしなければいけないので、4月10日からの IDB の前に、4月7日、8日に関西に於いて WUB の大会を行い、4月9日に沖縄で WUB の交流パーティを行なうということになっている。ただ、WUB 沖縄支部は、パーティばかりしているという批判もある。おそらく、会長が最も悩んでいるのではないだろうか。

WUBの将来は、けっして明るくない。6年間、さしたる実績がないからだ。その理由のひとつは、片手間にやっているからかもしれない。ただ、これから四世や五世の時代になるとWUBに入るひとが増えるだろう。現在は、(海外ウチナンチュと沖縄は)ハワイのサキマ氏とのつながりのような、人と人とのつながりで繋がっているのだが、そのひとたちがいなくなったら、文化・芸能やWUBのようなビジネスでつなげてゆくしかない。

その意味で、WUB 沖縄はしっかりしなければならない。沖縄の物産は世界のどこに出しても恥ずかしくないものだ。もっとも、実際に長寿国となったのは、豚といっても少ししか食わず、海からの贈り物を多く摂っていたからだ。生産する側(沖縄)が、しっかりしたもの、すなわち、長生きする、体調がよくなるというものをちゃんと提供しなければならない。伝統芸能は、世代が変わってもずっと、接着剤となるだろう。日本のものと異なるし、また、サンシンなどの誰にでもマスターしやすく、裾野の広い文化がある。これは、琉球王国の恩恵だと思う。原材料や、武力のない独立国であった琉球王国は、「ちむぐくる」、すなわちソフト面(芸能、料理)でもてなすしかなかった。移民と沖縄をつなぐものも、文化・芸能、そして「ちむぐくる」、王朝時代からつづくもてなしの心なのではないか。

現在は、「ちむぐくる」だけで、WUBは繋がっている。あるブラジル支部の会員は「ウチナンチュと取引するときは、用心や警戒をしなくてよい」という。これはメリットである。今後はこの「ちむぐくる」のうえにさらに輸出できるものを考え出さねばならない。

IV. 世界のウチナンチュを繋げるもの

ハワイのオキナワン・フェスティバルを見ている限り、たとえばハワイのオキナワン・コミュニティは当分安泰のように思える。しかし、その内情に深く思いをいたすと、リーダーたちの奮闘によってそれが保たれているのがわかる(白水・佐藤 2006)。

戦前の沖縄とその移民地はまさに地縁・血縁でつながるムラと、その親類縁者からなる第二のムラとの関係であった。そして移民が稼いだ金がムラへもたらされた。戦後は、戦場となって荒廃した母県を救うという必死の関係から始まった。移民地から沖縄への富の流れは変わらないが、単位がムラから沖縄(県)へ変わった。それからさらに時代が移り、移民地が二世や三世の時代になると、沖縄も海外ウチナンチュ・コミュニティも相対的に豊かになり、移民地からの富の流れは細くなった。そのかわり、移民地ではイメージとしてのウチナーが求められた。沖縄産の芸能や武道、そして食文化までがウチナンチュ・ムーブメント遂行のための文化シンボルとして用いられた(白水 1998; Hui O Laulima 2000)。文化シンボルなどのエスニシティ資源が母国(県)沖縄から移民地へ流れ始めたのである。

しかし、世代を経ると、こうした母国イメージで満足できる人ばかりではない。母国との関係、エスニシティを基礎としての関係といっても、より「実質」を求める人々が出てきた。

ウチナーンチュ・スピリットのゆくえ

こうした声を実体化したのが WUB である。華僑の活躍を見て始まったこのシステムも、国によって経済や産物等事情が異なり予断を許さない。だが、いまのところ、エスニシティを基礎とした世界ウチナーンチュの交流は、芸能等の固有の文化の威力に頼るか、WUB のような経済的なメリットに頼るかしか道はない、というのが識者の見解のようである。

参考文献

新垣誠 1998 「沖縄の心 (Uchinanchu Spirit)」『移民研究年報』第 4 号

Hui O Lailima 2000 *Okinawan Mix Plate*, HUOA

白水繁彦 1998 『エスニック文化の社会学』日本評論社

白水繁彦 2004 『エスニック・メディア研究』明石書店

白水繁彦・佐藤万里江 2006 「エスニック・コミュニティのリーダーシップ」『武蔵大学総合研究所 紀要』No. 15

田村紀雄・白水繁彦編 1986 『米国初期の日本語新聞』勁草書房